所沢市立美原中学校

学校だより No 7

令和４年度　第７号
１１月１７日（木）

学　校　教　育　目　標
・進んで学ぶ生徒（知）
・心豊かな生徒（徳）
・たくましい生徒（体）

私の考える「学び」についてお伝えします！！

今日は、期末テストが昨日終わったところですが、あえて社会で生きていくための「学び」についてお話しします。私の考えている「学び」とは、単純です。生徒の皆さんが、今日自分で何かを見つけた、気づいた、昨日できなかったことが今日できたという、「新しい自分への体験」を感じることだと考えます。極端なことを言うと自分が変わると毎日見ている景色が変わって見えるという新鮮な経験です。

世の中には、多くの学ぶべきものがあり、それを示すいくつもの物差しのようなものがあるとします。一番身近な例でも「知識の量」「困難な中での強さ」「我慢する力」「人に対する優しさ」「人間関係をつくる力」「人の心の豊かさ」「工夫しながら問題を解決する力」など本当に様々です。そのような多様な価値観の中で、自分が持っていない新しい物差しを手に入れる体験をするためには、「興味」と「必要性」が肝心だと考えます。

しかし、学校では、その多くの物差しを全部示すこともできません。中学生の皆さんは、今世の中の必要な物差しを全部知ることは、極めて難しいでしょう。しかし、現実には、「興味」と「必要性」にやる気スイッチを入れられる人が多く、自分が生きていくために必要な物差しを手に入れることは、単なる私見ですが今までの経験上、限りなく現実的だと思います。普通は、ただ漠然と良い進路をとるために勉強をする必要がある、良い就職をしたいなど、大きくとらえ、学校の勉強は、やるべきものと捉えやっている人も結構いるのでは、ないのでしょうか。私は、決してこのことを否定するわけでは、ありません。

しかし、これからを生きる皆さんの「学び」は、自分がどんなときにも変わらない支えになるものが、自分の中心にちゃんとあり、新しいことを知らねばならない時にも柔軟に対応しつつ、自分の生き方の芯は、変わらない（普遍的）ものとして持つことは、省略してはいけないものだと考えます。そして、そのことを中学校の頃から自分の中心になるものを探し始めてほしいのです。

例えば小学校や中学校での知識の事だけをお話しすると、英語の運用能力ですとか、国語の表現をする。読解をする。思考を深めるという能力は、非常に重要だと考えます。数学も理科も社会も、それぞれの基本的な物事を考えるための手立て、作ったり行ったりするやり方を学ぶことは、極めて重要かと思います。昨日までのテストでも知識量をはかることと、それ以外の学びを

振り返る問題は、その両方が大切だと示しています。知識が変われば、考え方もそこに至るまでの手立ても変わります。知識と知識を結び付けて新しいものを「見つけ」「気づいた」「できなかったことが、できるようになった」となれば、考え方や手立てが新しいものを知るまでのプロセス（過程）であり、その大切さを感覚で感じることにより、知らないことを知るための次への手立てとモチベーションになります。これが普遍的なものです。大げさな言い方をすると新しい自分へ飛躍するための中心的な考え方です。これを手に入れれば、今は、持ち合わせていない知識の量もさらに高みを目指したり違う方法で調べたり、新しい世界を見たいと考えた時、意欲的に学習できる原動力になるのです。人の成長は、速度も方向性も千差万別です。世のなかの中でたくましく生きるために「自分を伸ばし、人も生かして自分も生かすこと」を学び美原中学校の生活のなかで一歩でも進め、これからも学び続けられる自分の核となる「学び」を身に着けてもらいたいと思います。

校長見聞録　静寂のある朝読書のスタートと授業の静寂！！

読書の秋と言われる。秋空の広がる晴れ渡った日も寒い小雨の日でも、学校では、いつものように一日がスタートする。本校の一日のスタートは、朝読書とともにある。「静寂の時間」を大切にしている。「静寂」は、心を落ち着かせ、「思考を起動させる大切なルーティーン（手順）」だからである。朝読書の時間は、各クラスも「静寂の時間」が流れていて、私の足音がうるさくならないように注意する位の学年やクラスも多くある。「静かにして」などと注意する声さえもない。各自が各々に読書を行い成立する活動だからである。以前、幼さの残る１年生で静かにできないクラスがあった。「静かに始めなさい」と指導したとき、何人かの生徒のうなずく様子が見られました。共有する時間の大切さを理解している生徒が多くいるなと感じる。やはり生徒は、良い方向へ向きたいんだ。能動的な学習者だと実感した。

私は、日に何度か校内を回るときがある。その時に教室に入らなくとも、授業の様子を肌で感じることが多くある。授業に必要な「静寂」は、「授業の中にあるべき音」を消してしまう雑音がない「静寂」である。授業には、「歌声、返事、発言や発表等」など、「あるべき音」がある。「授業中の静寂」とは、これらが聞こえてくる「静寂」だ。「良い授業の静寂」とは、月や街の明かりのないところで、いつもは、見えないような星が見えるようなものでは、ないかと思う。「月や街の明かり」が悪いといっているのではない。静寂な夜空の中に普段見えないような星が見えることがある。授業の中にも、静寂な中ではじめて見えてくる生徒の意見や考えがあるように思う。「良い授業」とは、生徒が考えながら身につける授業であり、毎時示される「授業のめあて」にたどり着いたときに「わかった、できた、そうか！！」など心が動く瞬間のある授業なのだ。学校の授業は、家で一人行う勉強とは違い、前に触れた「静寂」のなかで、授業の「めあて」を獲得するため、静かに、深く考え、仲間の意見や考えを聞きながら、知識や技能を身につける。「考え学び、覚える」という過程を通し、静かに学習が成立する。